

探究学習の現場から



地元前橋を支え、元気にする。
将来、われわれと共に働く
前橋市民を育てたい。



進路指導主事

田崎 潤

たざきじゅん ●東京、千葉で教壇に立った後、1999年に群馬に移り、現任校では学年主任、進路指導主事を担当。

唯一の市立高校として
地元と生徒にできること

首都圏への人口流出が続き、中心部はシャッター通り。地元企業の事業継承も危うい。そんな地元前橋市の中で、唯一の市立高校が本校です。前身は女学校だったことから市民から「市女」と親しまれてきました。そんな本校が地域に対してできることは何か？そう考えて始めたのが、地元を元氣

付ける探究活動・地域活性化プロジェクト「めぶく」です。

これには、「ありたい自己像がなく、主体的に進路を決められない」最近の生徒たちに対して、国立大進学を目標にするような「出口指導」をすることへの問題意識がありました。身近な社会・地元をテーマにした探究活動で得た実感に基づき、「自分はどんな学びが楽しいのか」「将来どんな人間になりたいのか」を深く考えたうえで、進路選択に向き合ってほしい。さらに、地域で活動する中で「高校の学習が、実社会と結びついている」という実感を生徒に与えたいという狙いもありました。

地元進学率が
5割から7割に急上昇

「めぶく」は、最終的に3年次で自分が究めたい学びから進路先を決めることをゴールにした探究学習です。そのため、1年次では前橋の課題探究、2年次では興味がある課題の発見、3年次ではこれまでの探究を基に自分の進路を決めることにチャレンジするという流れで設計しています。最大の目玉は、2年次に実施する模擬市長選挙です。これは地元活性化に向けたマニフェストをクラスごと

に考えてプレゼンをし、選挙戦を戦うもの。アイデア出しから選挙準備、選挙から当選発表まで生徒が行い、マニフェストは実際に市議会に提案し、回答をもらいます。魅力的なアイデアを出すためには、地域の課題の理解が必要ですから、1年次に地元の企業や商店街にインタビューを実施して、地域の現実を認識させるようにしています。

このように「めぶく」には地元の協力が不可欠です。行政には模擬選挙で選挙管理委員会の協力を受けたり、市議会議員に質問をする機会も設けてもらったりしています。企業にはインターンシップで協力を受けています。これは単なる就業体験ではありません。例えば農業の会社では、今は土を使わずに農産物を生産し、食品加工会社では焼鳥の原料となる鶏肉を南米から輸入していることなど、最新の企業活動について知ることが目的です。また、多くの外国人従業員が働いている姿を実際に見ることで、前橋と世界のつながりも実感できるでしょう。地元の大学によるサポートも助かっています。大学の先生にインタビュー調査のレクチャーを受けたり、大学生にワークショップの手伝いを頼んだりすることもあります。

市立前橋高校の探究学習

内容	前橋市活性化に向けた提案を高校生の視点でまとめ、市に提案する。1年次に商店街インタビュー等で地域課題への理解を深め、2年次に模擬市長選挙、模擬議会を実施。これらの経験を進路選択につなげる
対象・期間・時数	・1～3年次の「総合的な探究の時間」を活用（週1時間実施）
テーマ例	・「前橋市の活性化」が大テーマ。チームを組んで地域の将来について考える
体制	・地域の行政、市議会、教育機関（大学等）、商店街、民間企業などと連携し、「オール前橋」の体制で進める
評価方法	・「6つの力」を軸にしたルーブリックに基づき生徒自身が自己評価 ・各活動を終えた段階で、必ず発表・振り返りの時間を設ける

地域活性化プロジェクト「めぶく」の流れ（2年次9～12月の授業を抜粋）

行事	内容	協力
ブレインストーミング演習（全2回）	ブレインストーミングの手法を用い、住みたい町と住みやすい町について考える。	・高崎商科大学（講師、学生） ・地元企業（社会人48人）
模擬市長選挙ワークショップ①～③	前橋市活性化に向けた高校生目線の提案を考える。	・共愛学園前橋国際大学（学生）
市議会議員講演会	前橋市議会議員の方々の前橋市に対する思いを聞き、自分たちが考えた前橋市への提案について意見をいただく。	・前橋市議会議員12人
模擬市長選挙ワークショップ④	選挙準備をする。たすき、ポスター、原稿完成、発表練習などを行う。	・共愛学園前橋国際大学（学生）
模擬前橋市長選挙立会演説会	各クラスに1人配置する大学生を市長候補として、前橋市活性化に向けたマニフェストを発表する。投票・開票・当選発表までを行う。	・共愛学園前橋国際大学（学生） ・前橋市選挙管理委員会 ・明るい選挙推進委員会
前橋市高校生模擬議会準備（全2回）	模擬前橋市長選挙で各クラスで検討したマニフェストにさらに磨きをかけ、クラス代表が発言する準備をする。	———
前橋市高校生模擬議会	各クラスの代表3人が前橋市活性化への提案を行い、前橋市からの回答をいただく。	前橋市議会・前橋市

*学校資料を基に編集部で作成。



▲ブレインストーミング演習の様子。「何を言っても必ずほめる」というルールの下、専用カードを使って思いついたアイデアを瞬時に次々発表する。意見を出しやすい雰囲気づくりが狙い。

地域に入って経験を積むうちに生徒は変わりつつあります。本校では3年間で育成をめざす力として*「6つの力」を設定し、定期的に自己評価をさせています。入学時の調査では、「協働力」が高い一方で、「リーダーシップ」が低い傾向だったのですが、2年次では「学びに向かう力」や「リーダーシップ」の評価が向上しました。進路選択にも変化が現れました。「めぶく」で取り組んだテーマをもっと深めたい」と大学進学をめざす生徒が現れ、「地域のことを学びたいから、地元の大学がいい」という生徒も増加し、かつて5割程度だった地元進学率が7割程度になっています。活動中に地元大の大学生と接する機会が増え、大学での学びや成長をリアルにイメージできるようになったことが要因でしょう。

将来の町を支える
市民づくりへ

本年度から前橋を住みたい町にするためのアイデアがもつと出るようにと、ブレインストリーミングを教育に取

大学への期待

大学の教育力は学生でわかる 現役学生の派遣を期待

出前授業ばかりが高大連携ではありません。私は、現役の学生と高校生がつながる機会が増えることを期待します。高校生は学生の姿を通して、その大学の教育や自身の成長をイメージしやすくなりますし、大学にとっても、高校を“学生を鍛える場”として活用できるメリットがあると思います。

*「学びに向かう力」「課題発見力」「自己管理能力」「計画立案力」「協働力」「リーダーシップ」の6つを設定



たけやす・ひでこ ●1950年大阪府生まれ。1973年天理大学外国語学部卒業。1979年関西学院大学大学院社会学研究科博士課程単位取得退学。追手門学院大学教授を経て、2000年京都女子大学現代社会学部教授。2016年同大学名誉教授。2017年同大学特命副学長。2020年より現職（同大学初の女性学長）。専門は社会学。著書に『近代化と家族・地域社会』など。



私の改革論

No.39

京都女子大学・学長

竹安栄子

荒波に挑むトップ

取材・文／仲谷宏 撮影／谷口哲

多様な女性の「らしさ」を「つよさ」に変える大学へ

自由に発言・行動できる環境で、伸びやかに生きる女性を育成

男女の格差が大きい日本社会の現状

かつて日本の社会では、性別役割分業の意識が強く、社会で果たす役割や選択できる職業に男女で明らかな違いがありました。良妻賢母となることや、保育や看護の仕事に就くことが、女性らしい

とされ、女子大学はそうした生き方・働き方を実現する手段として存在意義を発揮していました。

時代が変わり、男女共同参画社会の実現に向けた法整備などが進むと、女性が活躍できる分野は広がり、生き方・働き方も多様な選択ができるようになりました。そのような変化の中、本学は現代社

京都女子大学 ●1920年に開学した京都女子高等専門学校が前身。1949年、京都女子大学開学 ▶5学部10学科5研究科、学生数約5800人 ▶建学の精神は、「親鸞聖人の体せられた仏教精神にもとづく人間教育」 ▶2011年に女子大学で初となる法学部を開設。2019年には発達教育学部に教育学科・福祉教育学専攻、心理学科を設置

個々の意識を育む女子大学の教育環境

日本の男女格差が大きい要因の一つとして、意思決定分野における女性の少なさがあります。女性の活躍は、社会のさまざまな分野に広がっていますが、組織の意思決定は、男性中心であることがほとんどです。これには、男性の前では一歩下がってしまいがちな女性の意識が関係しているのではないのでしょうか。長期にわたり男性優位の社会が続く中、男性の目を常に意識して行動する習慣が、女性の内面に刷り込まれているのです。

そうしたジェンダーの価値観から離れて、個々として、自分らしく、自由に行動できる環境が女子大学にはあります。私の人生、もう介護しか残っていない」と、つぶやく彼女たちに必要なのは、再び社会に踏み出すために、「私は働きたい」と周囲を説得する力です。

一方、eラーニングコースと土曜日通学コースは、AIリテラシーなどを身に付けて、スキルアップをめざすビジネスパーソンが中心です。女性の多様性に対応できるように、講座とキャリアアカウンセリングを充実させて、きめ細かな支援を実現していきます。私の願いは、全ての女性が「女性だから」といって、自分の生き方を諦めないこと。女性が自分らしく、しなやかに生きるための改革を、今後も進めていきます。

子大学にはあります。男性の前では遠慮がちに振る舞う日本の女性も、女性だけの環境ならば、自らの持つ能力を自由に発揮しやすいはずです。人は、自由な空気を一度味わうと、決してそれを忘れません。女子大学で、ジェンダーバイアスを離れた自由な雰囲気味わうことは、自分の心を生涯解放することにつながります。

さらに女子大学では、あらゆる活動を女性だけで行わなければならないません。先頭に立って組織を引っ張る役も、外部の人と折衝する役も、全てを女性が務めます。こうした経験は、意思決定の分野で活躍する力や資質を養う貴重な機会となるでしょう。

交渉術を身に付け、リーダーシップを発揮できる女性が、例えば地域社会の中で意思決定の場にどんな入り込んでいけば、女性が住みたいと思う街、子育てをしたいと思う街が実現できるはずです。そうなれば、大きな社会問題となっている少子化の克服にもつながると思います。

女性への「期待」を伝え「経験」を後押しする

自らを解放し、さまざまな経験ができる女子大学のよさを、最大

限生かすことに本学では取り組んでいます。その一つが、地域連携研究センターで開講している「女性地域リーダー養成プログラム」（副専攻）です。これは、さまざまな企業やNPOなどからゲストスピーカーを招いて、女性への期待を語ってもらうもので、全学部生が履修可能です。自分たちがいかに社会から期待される存在であるかを実感すれば、新たなことに挑戦する勇気が湧いてきます。加えて、社会問題を他人ごととせず、自ら解決に取り組む人たちとの交流は、学生の当事者意識を高めます。

学生の主体的な活動を後押しする制度としては、「らしつよチャレンジ」があります。これは、本学のミッションである「らしさをつよさに未来をひらく」を体現する活動を支援する制度です。本年度は8つの取り組みが動いています。例えば、ITクリエイティブ活動に取り組む団体は、高校生のために、バーチャル学部見学会を自主開催するなど、コロナ禍で大学への入構が制限される中でも、自分たちが今できることを考えて、活動しています。

本学では2010年度から、大規模なキャンパス改修を進めており、学生が集い、対話し、つながり

発信できる場の充実を図っています。学生の主体的な活動と、生まれ変わったキャンパスとが結びつければ、さらに活動のレベルアップが期待できます。

社会で生きていくロールモデルとしての女性教職員の存在も、学生に好影響を与えています。子育てと仕事の両立に取り組む先輩からは、普段の会話の中で実感がこもったアドバイスがもらえます。それは学生たちにとって「何とかやっていける」という将来に向けての自信となることでしょう。

自分らしい生き方を生涯にわたって支援

社会人向けのリカレント教育にも、現在力を入れています。本年度からは、平日昼間に通学するコースに加え、eラーニングコースと土曜日通学コースを新設しました。

平日通学コースは、出産・子育てなどでキャリアを中断した30〜50歳の女性を中心に

注目の経営指標

キャンパスが生み出す価値



2010年度から、多額の財源を投資してキャンパスの大改造を実施。これまでに8棟の新築と2棟の増築、5棟の全面リニューアルなどを行ってきた。学生が集い、対話し、つながり、発信する機能を高めたキャンパスを活用して、新しい価値の創造やSDGsの推進を積極的に図っていく考えだ。